

伝説の整理部長をしのぶ 構想力と突破力

■新編集講座 ウェブ版 第147号 2020/5/1

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

鉛活字で白黒印刷していた時代からパソコンやカラー紙面の導入を主張するほど「次代の新聞」に対する構想力を備え、同時に、「過激な改革」に驚き難色を示す上司を説得し、実現にこぎつける突破力も持つ方でした。大阪本社整理部長（現・編集制作センター室長）の大先輩であり、「伝説の整理部長」と呼ばれた桐生輝一さん＝右欄参照＝が亡くなり10年になります。ネット時代の新聞像を模索する今こそ、その知恵に学びたいと思います。

■ その名も「乱気流（桐生）」

桐生さんは、1988年のソウル五輪や89年の昭和天皇崩御の頃に大阪本社の整理部長を務めました。もう30年以上も昔のことです。私は、桐生さんと一緒に仕事をした最後の世代に当たると思います、


私は、桐生さんが部長代理から部長に昇任する直前の87年に、東京本社整理本部（現・情報編成総センター）から大阪本社整理部に異動したのですが、「乱気流（＝桐生）」の異名を持つ桐生さんのエピソードは全国の整理部門に鳴り響き、転勤前からその存在を知っていました。

- ▽ 「同じ記事に何十本も見出しを出し、大組み（紙面を組む編集者）が活版さん（鉛活字を鋳込む職人）に叱られた」＝写真①参照
- ▽ 「大組みにレイアウトを説明する時、グルグル円をいくつも書くだけで、全体像がさっぱり分からない」＝図②③参照
- ▽ 「社会面で桐生さんの指示に従ってトップと二番手を置いたら、左に漫画を入れるスペースがなかった」＝図④参照

■ 整理に誇りと愛着


大阪に転勤し実際に会った桐生さんは、想像通り、エネルギッシュな情熱の人でした。「九州男児の典型なのかな」と感じたものです。桐生さんはまた、紙面を作る喜びを知り、心の底から整理（紙面編集）の仕事に誇りと愛着を持っていました。当時の部内文書を引用します。

「外勤から整理部への異動を命じられた記者の中には、『世の中が真っ暗になった』という人がいた。また、社交的でない人、事件が好きでない人が整理部向きだと思っている人も多い。これは間違っている。整理部というところは、外から見られている以上にダイナミックな所である。『世の中が真っ暗』になるほど小さな世界ではないし、そんなヒマもない。知的好奇心や向上心のない者の楽園でもない。『他社に負けない、読者を引き付ける魅力ある紙面』を作ることに、あふれんばかりの情熱を持つ者の世界である」＝「整理部入門講座」より




桐生輝一（きりゅう・てるかず）さん 1939（昭和14）年生まれ。45（同20年）の終戦時は、最後の「国民学校」（戦時中の小学校）1年生。本土決戦のため九州の山の分校に駐屯していた兵隊が「玉音放送」（昭和天皇が終戦を告げたラジオ放送）を聞いて泣くのを見たそうです。九州大学卒。61（同36）年毎日新聞社入社。金沢支局を振り出しに、主に大阪、東京両本社の整理部で活躍。96（平成8）年退職。2010（同22）年死去。添付の訃報は、同年4月23日 毎日新聞朝刊（大阪版ほか）。

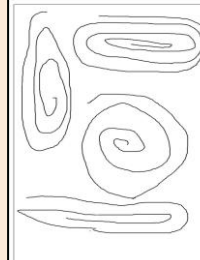
玉音放送を知る戦中派



（左）①鉛活字の見出し例。主見出しは「政局、流動化の様相」、脇見出しは「田中派内確執も深まる」とあります（印刷のため、字形も並びも反転しています）。1字1字、型枠に鉛を流し込んで作るの、手間がかかりました。いくつも見出しが出てきたら、作る側としては、「一つにして」と言いたくなります。



見出し
写真
箱組み
見出し
見出し
見出し



（上左）②普通のレイアウト図。見出しや写真、箱組みなどの素材が書かれています。（上右）③桐生さんが書いたレイアウト図のイメージ。グルグル円を描くだけです。（下）④トップの横見出し、二番手の縦見出しと表を置いたら漫画が入らない……ということは、普通はありません。桐生さんの場合は、見出しが大きすぎるのです。



野生628種に赤信号
流れ弾…倒れる子供、老人
暗やみ逃げまどい
闇を走る人、銃声、叫びやまぬ

■ カラー、パソコン、「先」を見て

桐生さんは、編集者として本当に「先」を見通した人でした。

たとえば88年のソウル五輪です。「これからはカラーの時代」と宣言してカラースペシャル面を特設。私たち編集者に「写真のほか、見出しやカットもカラーの紙面を作れ」と命じたのです。

当時はモノクロ全盛時代。カラー処理は外注で、入稿締め切りは記事の締め切りより3～4時間前でした。テレビで観戦し、原稿が来る前にメイン記事のテーマを想像し見出しやレイアウトを決める「ウルトラC」の作業。見事に「着地」させ、同業他社を仰天させました＝図⑤、新編集講座132号「ソウル五輪」、133号「続・ソウル五輪」参照。

また早くからパソコンに着目。83年総選挙から議席予測に活用しました。「国民機」と呼ばれたNECのパソコン「PC98（キューハチ）」発売が82年ですから、時代の最先端を走っていたのです。

パソコンで言えば、デザインに使うマックにも注目し、90年に導入。翌91年の統一地方選では、私たち選挙班と社内デザイナーで知恵を出し、「ビジュアル選挙紙面」を作りました＝図⑥。

■ 「知性」と「情感」と

桐生さんは、編集者がニュースの価値判断を誤ったり、稚拙な見出しを付けたりすると、雷を落とす怖い人でした。でも「勉強しろ」という叱咤（しった）は正当だったと思います。英字紙を読み、考古学や原発の本を読み、東西の古典に親しめ。クラシックやジャズも聴け。俳句を読んで表現力を付けよ。そう諭されました。

そんな「知性」の裏付けがあったからでしょう。歴史の転換点の際は、紙面で大胆な扱いをすることをためらいませんでした。89年11月、「ベルリンの壁」が崩壊した日の大阪本社1面は、躍り上がって喜ぶカップルの写真を8段という破格の大きさに掲載しました＝図⑦。「もっと大きく」という桐生さんの声が後押ししたからです。

同時に、「情感」にあふれた、優しい人でもありました。転勤が決まった部員のお嬢さんが幼稚園で「お別れ会」を開いてもらった後、急に異動が延期。お嬢さんが「また幼稚園に行くのは嫌」と泣いた時、氏は部員宅を訪れ、お嬢さんに直接頭を下げたそうです。

■ ダンディズムを貫いて

整理部長を退き他の部に転出した後、桐生さんは二度と整理部に現れることはありませんでした。「OBが現役に訓戒を垂れる」のを潔しとしない、桐生さんのダンディズムだったと思います。

桐生さんが96年に定年退職された際、門下生一同で惜別号外を作りました＝図⑧。見出しやレイアウトは本物の毎日新聞そっくりで、「余録」（いろは歌にちなんだ大みそか版）もある凝りようです＝図⑨。楽屋落ちもありますが、多くは予備知識なしでも分かると思います。ぜひ目を通し、桐生さんの熱情を知っていただければ、と思います。



⑤ 88年9月26日 毎日(大阪朝刊スポーツ面)
ジョイナー選手の活躍をフルカラーで表現。



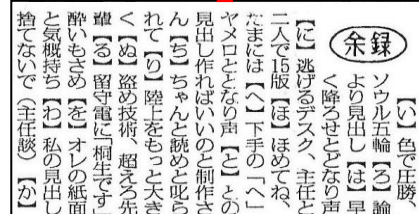
⑥ 91年4月8日 毎日朝刊大阪版
大阪府知事選2候補の市町村別得票数をビジュアルに表現。



⑦ 89年11月10日 毎日(大阪) 夕刊1面
桐生さんに押され、写真を大きく扱いました。



⑧ 桐生さん定年退職の惜別号外。



⑨ 号外に掲載した「余録」